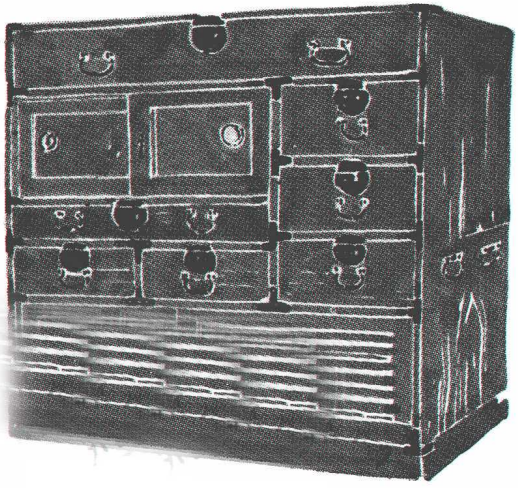
しぶちん

山崎豊子

しぶちん

山崎豊子



中央公論社

し ぶ ち ん

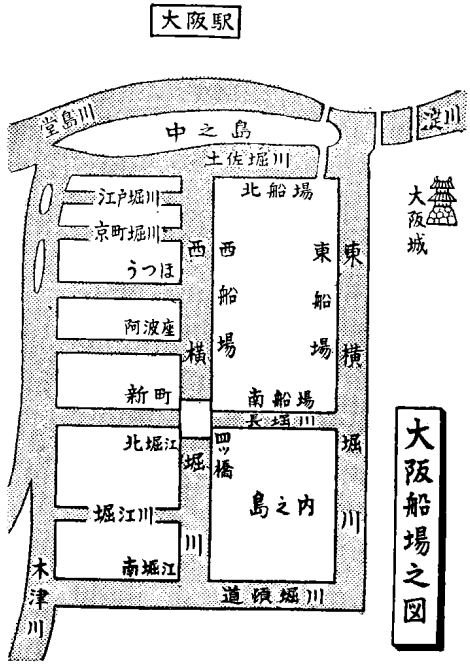
昭和三四年二月五日初版
昭和三四年二月二五日三版
著者　山崎豊子
発行者　栗本和夫
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二ノ一
振替東京三四定価二六〇円
凸版印刷　協和製本
©一九五九
〈検印廃止〉

目次

船場狂い　一
死亡記事　三
持参金　五
しぶちん　三
遺留品　一五

船場狂い

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c


大阪駅
堂島川
中之島
土佐堀川
淀川
大阪城
江戸堀川
京町堀川
うつぼ
阿波座
新町
北堀江
堀江川
南堀江
木津川
西横堀川
北船場
西船場
東船場
南船場
長堀川
四ッ橋
島之内
道頓堀川
東横堀川

大阪船場之図

一

久女は、自分の眼の前を流れている長堀川をゆっくり渡りかけた。橋下の鈍色に澱んだ川面には、藁しべや卵の殻が浮かび、秋の陽の光りが、薄い影を落している。

この長堀川を隔てて北向うが、船場といわれる大阪の富商の集まる街であった。船場は、長堀川、西横堀川、土佐堀川、東横堀川によって、額縁のように取り囲まれた四角な地帯で、隣接している街とは、おのおの橋で往来するようになっている。この四つの川は、いずれも五間そこそこの川幅をもった、何の変哲もない街中の川に過ぎなかったが、久女にとっては、いつも自分を、遠いところへ押しやってしまうとてつもない広い川筋に見えた。

五十四歳の久女は、この川筋に懸った橋を渡って、船場へ移り住み、御寮人さん（奥さん）御家はん（女隠居）と呼ばれてみることが、生涯の念願であった。

そんな久女は、着物の着方にまで船場風を心得て、更衣のしきたりをきちんと守ってい

た。船場では、気温の寒暖にかかわらず、四月一日から男女ともに袷になり、外出には必ず袷長襦袢と袷羽織を着用する。六月一日からは単衣になり、菖蒲節句から帷子、麻長襦袢、紹羽織、浴衣は六月十五日から、七月一日から薄物、紗の羽織、九月から単衣、十月から袷という更衣のしきたりがある。これを少しでも間違えると、世間から、みっともないとうしろ指をさされるが、久女は、そんなところにまで気を配って、季節の変り目ごとに寸分違えず、船場流の更衣をして、お茶のお稽古に通っていた。

お茶のお稽古も、格別にお茶が好きだったのではない。本町四丁目の裏千家のお稽古場は、場所柄、船場の御寮人さんが沢山集まっているから、ここで御寮人さんたちと近附きになるのが、久女の目当であった。

久女は、地味で目だたないが金目のかかった着物を着て、それだけの気持の余裕をもった上で、いつも御寮人さんたちのお道具自慢の聞き役に廻っていた。

「へえー、また、ええお道具買いはりましたんでっか」

「さよだす、うちの旦那はんが、えろうお道具に凝りはりまんので、今度、新しいお茶室を作りましたついでに、ちょっと出もの買うただけでござりまんねん」

「出もの云いはっても、紅葉呉器のお茶碗やったら、なかなかわてらでは簡単に拝めもし

まへん。是非のこと、近いうちに、お道具拝見させておくれやす」

こう持ちかけて、いつの間にか、船場の良家へ出入りするようになった。

この日は、新しくお稽古場へ通って来る鋳物問屋の御寮人さんの紹介があった。順慶町四丁目の兼松鋳物の御寮人さんで、三ヵ月ほど前に、後妻に嫁いで来たばかりであったが、姑は既に亡くなり、舅だけのせいか、嫁入り早々に、お茶のお稽古に出て来られる結構な立場であった。

面長の白い顔に、鼻筋が刃もののように薄っすり高く、眼尻がつり上っていたので、白狐のような感じがした。着物は小浜縮緬の袷に丸帯を胸高に締め、三つ紋附きの羽織という、まるで嬢はんのように着飾った装いであった。これが古顔の御寮人さんや御家はんたちの反感をかったらしく、最初から除け者扱いにされていた。八畳ほどの待合処に、五、六人がお点前の順番を待ち、自分の番が来ると、銘々の人に、

「お先ぃさんでござります」

と、丁寧にことわったが、誰も兼松の御寮人さんには、挨拶をかけなかった。

久女も、はじめのうちは、この三十五、六歳になったような御寮人さんを、皆と同じように除け者にしていたが、兼松鋳物問屋——順慶町四丁目——船場有数の商家——こう胸

の中に思いあたると、俄かに席をたった。
用もないのに厠へたって、小用をすましたような振りをして、帰って来た時は、前と坐り場所を変えて兼松の御寮人さんの横へ坐った。そして、そっと膝をにじり寄らせて、辺りをはばかりながら、
「御寮人さん、おはじめて、わては小間物問屋を商いしとります円山だす、どうぞ、まあお楽に――」
と、古参らしい労りを見せた。
「いいえ、わてこそ、つい御挨拶が行き届きまへんと、すんまへん。どうぞ、お宜しゅうしておくなはれ」
と近附きの挨拶を返しながら、御寮人さんは、素早く久女の着物に目をあてた。
久女は、船場風の作法によって、秋ぐちの衣裳として、紋織の着物に、黒縮緬の袷羽織を重ね、繻珍の帯を締めていた。この作法にかなった久女の衣裳を見るなり、御寮人さんは、急に親しげな眼つきになり、嫁いで来たばかりの主人のことから、店の商い、先妻の残した二人の子供の話まで喋ったあげく、久女の顔をのぞき込むようにして、
「もし、お急きやおまへんでしたら、ご一緒に参じとおます」

と、連れだって帰ることを、誘いかけた。

お点前をすまして、お稽古場の玄関先に出ると、兼松鋳物の女中と丁稚が、供待部屋で待っていた。女中は上女中らしく銘仙の着物を着て、丁稚は丁稚縞の木綿の着物に紺の前垂れをつけ、一眼で老舗(しにせ)の奉公人衆とわかる装(なり)をしていた。

「お待っとうさん」

鷹揚に犢いながら、御寮人さんは女中の揃えた畳表の下駄を履き、袱紗やはき替えの足袋を入れた風呂敷包みは丁稚に持たせた。

本町四丁目から、問屋筋のたち並ぶ渡辺橋筋に沿って南へ向かった。兼松の御寮人さんと久女が肩を並べて先にたち、五、六歩離れて、女中と丁稚が随いて来たが、女中と丁稚は、金物問屋の前へ来ると、きまって足を停め、

「今日は、毎度おおきに――」

と挨拶して通った。同業者に対する船場の作法であったが、久女はそんな背後の動きが気になって落ちつかなかった。兼松の御寮人さんは、まだ話し足りないらしく、ゆっくり歩きながら世間話をし、順慶町の辺りまで来ると、足を停めた。

「本日は、えらいご親切にお引き廻してくれはりまして、おおきに、わてとこ、ついそこ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

でござりまんねん」
順慶町四丁目の角から、四、五軒、東へ入ったところを指さした。五間間口の店構えの屋根の上には、古木に『兼松』と大きく記した看板が掲げられている。表の大阪格子を通して、忙しくたち働いている店内の模様がのぞかれ、店先で四、五人の丁稚が荒縄で荷作りをしていた。
「あ、そうでっか、ほんなら、わてはここでご免やす」
久女が小腰を屈めて挨拶しかけると、
「あんさんも、すぐそこの佐野屋橋でっしゃろ、わてとこのお竹どんにお店先まで、お送りさせまっけど、佐野屋橋の何丁目ぐらいでっか」
うしろの女中の方へ振り返って、行き届いた気の遣い方をした。
「いいえ、結構だす、わてとこは、佐野屋橋を渡って、向う側の南へ入ったとこだすよって」
「へえ、ほんなら、橋向うの鰻谷西之町でっか――」
こう云うなり、急に狐のような白い顔を、冷たく権高に構え、
「お先ぃだす、さいなら、ご免やす」

ついと背中をみせ、女中と丁稚を促すようにして、順慶町の角を曲って行った。

久女は、佐野屋橋を渡ってから、橋際に佇んでいた。たった五間幅ほどの澱んだ何の変哲もない川筋が、船場という大阪の尊大な街を型造っている。久女は佐野屋橋の手すりに手をつき、五十を過ぎてから急に白髪の殖えた頭を振るようにして、大きな吐息をついた。腹だたしい奇妙な気持だった。いつも船場という尊大な街から足蹴のようにされながら、かえってそれが、船場への強い執着になって行った。

久女は、今までも、同じような思いを何度か経験したことがある。

二

一度は、土佐堀川を隔てて、北船場と向い合った肥後橋の橋際であった。

久女は、この肥後橋の近くの堂島中町に生まれた。この辺りも、小売商、問屋が立ち並ぶ繁華な商いの街であったが、久女の子供ごころに真っ先に気附いたことは、土佐堀川の向うの子供だけ変った名称で呼ばれることであった。

男の子は、ぼんぼん。兄弟が沢山ある場合は、兄(あに)ぼん、中ぼん、小ぼんなどと云われていた。女の子は、嬢(いと)はん。これも姉妹の多い時は、嬢(とう)はん、中嬢(なかいと)はん、妹嬢(こい)さんという風

に呼ばれた。

夏祭りになると、このぼんぼんや嬢はんの中からだけ、難波神社のお稚児さんが選ばれた。本祭りの午後から、船場の家並は麻布定紋入りの幔幕を張りめぐらせ、高張提灯をずらりと掲げ、男の子のある家は、その子供の人数だけ、青貝細工に銀金具の飾提灯をたてて氏神の渡御を迎えるが、お稚児さんに選ばれた家は、さらに金屏風を張り出して店先を飾った。

賑やかな露払いに続いて、贅を尽した御神具、御神体の渡御にかかると、もう、御渡りの道筋は、御神体を迎える人々でぎっしり埋められる。御神体に続いて、夏枯れの商いを景気附ける暴れ神輿、そして、最後に美々しく衣裳を着飾り、人力車に乗った稚児行列が連なった。俥の上の子供たちは雛人形のように真っ白に塗った顔に、薄墨色の稚児眉を描き、朱房のように口紅を刷き、蟬の羽根のような透明なきれいな衣裳を重ねていた。人力車の幌のうしろへ、長方形の金紙に姓名を記した名札をひらひらさせ、俥の両側には、その家の定紋入りの紋付を着た女中と丁稚が、徒歩で附き添っていた。

丁稚は、大きな団扇で、炎天の中を揺られるぼんぼんや嬢はんの顔を煽ぎ、女中は氷を包み込んだガーゼを、何度もぼんぼんや嬢はんの口にあてて咽喉を潤おわせ、お腹悪うせ

んといておくれやすと、囁いていた。

御渡り道を埋めていた人々は、稚児俥が眼の前を通ると、

「ああ、泉屋のぼんぼんや、あれが跡取りはんやぜ」

「あの前から三番目の別嬪さんが、吉田屋の妹嬢さんや、まだ六つぐらいやなあ」

などと、一々、その名前を呼びあげて、指した。その度に、母親に連れられて渡御を見に来ていた久女は、やや浅黒い顔を、真っ赤にして興奮した。

渡御が終ると、一度に潮がひくように帰り足になって行く人波の中で、久女は、八、九歳の子供にしては、ひねすぎるぐらいの仏頂面をして、もと来た道を歩いていた。母親が、途中で金時氷でも食べて帰ろか、と云っても、久女はすねたように答えなかった。

船場と堂島の間を流れる土佐堀川に懸っている肥後橋を渡り切ると、久女はいきなり、母親の袂をひき千切れるほどきつく摑んだ。

「なんで、この橋から向うの子だけ、ぼんぼんや、嬢はん云うてもろうて、あんなきれいなお稚児さんになれるねん」

「あ、あれは船場のお子やからや」

母親は何気なく答えたが、久女には、母親が、久女の家の近所の子供には、あの子と云

うくせに、船場の〝お子〟といったのに、気がついた。
「お母ちゃん、なんで、船場の子のことを、そないお子いうのや、うちのお向いの愛子ちゃんのことは、いつもあの子いうやあらへんのん」
「そら、ほかの人が皆、そう云うてはるさかいな」
母親は、久女の激しい不満などには気附かず、無頓着にそう云った。久女は、その日、はじめて着せてもらった赤い平絹の祭り着の裾を、蹴りあげるような勢いで、母の手を振りきって走り出した。走りながら、ぜいぜいした声で、船場のお子、船場のお子、と云った。
小学校を卒業する年になると、久女は級中で、二、三番の成績だったので、受持の先生は、府立の有名校をすすめたが、久女は私立の聖徳高女を選んだ。
聖徳高女は、船場のど真ン中の平野町にある明治十年創立の、大阪で一番古い歴史をもつ女学校であった。檜材を使った豪奢な日本建築で、正門は宮殿のように反りかえった深い屋根を持ち、校舎も、一つ一つが、小さな宮殿のような凝った仕上げになっていたから、知らない人は、何宗の寺院か、何様の大邸宅かと間違えた。制服は着物の上にえび茶色の袴をつけるのが、その頃の女学校の普通のきまりだったが、聖徳高女では、この袴の裾に

白い山形の線を入れて、一際目だつようにしていた。

生徒は別に船場の子女に限るという規則はなかったが、殆んどが船場の子女で占められていた。一つには、学校の位置が北船場や南船場の端からも、歩いて二十分以内で通学出来るためだった。お供に女中か丁稚さえ随けて置けば、電車で通うより妙な虫がつかないという親たちの安心を得ていることと、昔から鴻池や住友という大阪の良家の子女が、聖徳高女出身だという親の見栄も手伝って、聖徳高女は船場の子女が多かった。

久女の両親は、聖徳高女に行きたいと聞いただけで晴れがましく思い、月謝も飛びぬけて高いし、交際も派手過ぎるからと、頭から反対した。反対されると久女は、

「ほんなら、女中衆みたいに、うちも小学校だけで止めとくわ」

とすねてしまったが、結局、母親のとりなしで、たまたま家の小間物商いが有卦に入って繁昌していたので、聖徳高女へ行けることになった。

入学式の日は、参列の生徒と父兄よりも、お供の数の方が多かった。正門は生徒と父兄の通行に限られ、正門横の通用門がお供の出入りにあてられたが、この辺りへお為着を着た女中や丁稚が集まった。式が終ると、一時に、どっと出て来る旦那はんや御寮人さん、嬢はんの姿を見失うまいとして、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c